

〈巻頭言〉

主体的・対話的で深い学びの授業づくり ーメタ認知と見方・考え方によって「深い学び」をー

関西福祉大学 加藤 明

受け身的な講義が苦手な大学生のため、発表や討論などの活動を取り入れ、主体的、能動的に学習に取り組ませるアクティブ・ラーニングが、米国で発案された。わが国でも大学への導入奨励を経て「主体的、対話的で深い学び」という表現の下、小学校から高等学校までの授業に取り入れられる。

主体的とは、人ごとではなく「自分ごと」「自分にとって」という意味である。おもしろそうだったといった導入の工夫も大切だが、やっているうちにますますおもしろくなってくるのが教師の指導力の見せ所だ。そのためには、分かる、できるの成果はもとより、思考力や表現力、粘り強く取り組む力などが付いたといった手応えがなくてはならない。テストだけでなく、一人ひとりの成長や向上の成果を取り上げて返す教師の褒めや励ましの言葉の大切さが指摘されるゆえんである。「ますますおもしろくなってきた」の後は、終わってからでも続けたい、深めたいと自分の目標になるのが理想である。

「自分ごと」の意味を深めることも忘れてはならない。自分にとってのことが、やがて社会にとって、人間、歴史、文化にとって等々、意味が（同時に責任も）拡大、深化していくのが人間としての成長、成熟だからである。

対話的とは、言葉によるコミュニケーション、知的なコラボレーションである。「話す、聞く」は、直接的な言葉のキャッチボールであり、相手の思い受けとめて返すやりとりによって、お

互いを理解し合うことである。「読む」は、言葉を紡いで文章による筆者との対話であり、時空を超え、自己に沈潜しながら思いや考えを深く受け取ることができる。

「書く」（描く）は、思いや考えを整理して表現することであり、自分を見つめ直す、自分との対話でもある。ノート指導でも、板書を写すだけではなく、大切だと思うことを書き加えたり、アイデアを絵や図で表してまとめたりと、アクティブなノートづくりが奨励されなければならない。

深い学びとは、既習事項を活用しての問題解決にとどまらず、解決を振り返ってのよりすぐれた解決や関連づけのあり方等を構築する人工知能（AI）的な学びを目指すものと、もう一人の自分からのメタ認知によって、自分自身のあり方を見つめ、人格の完成、人間性育成のための学びを目指すものがある。これらは成長し続けるための認知的・人間的なメタ認知能力で、教師も大人も子どもに負けず成長し続けるための能力である。

このような深い学びのために、何を教えるかといった講義中心の授業に、どのように教えるかについて、前述した学習過程との統合を図り、成果を確かめながら柔軟な軌道修正によって指導を展開するマネジメント力が求められる。学校は、学びと育ち、学力と成長の両全を保障する所でなければならない。